あしたばん

2011年
（平成23年）
9月21日
水曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

第十三号

"いま"が響き続けるように

ついに十九日に開校した三宅島大学！天候が心配されたが開校を祝うかのような晴天の下で行われた。三宅島大学の学長である平野祐康村長の開校宣言から始まり、東京都生活文化局文化振興部長や、三宅島大学プロジェクトの実行委員会の来賓の方々の祝辞を頂き無事開校式を終えた。

式典では開校記念式典演奏曲として『一〇〇〇年のこども（世界初演）』が披露された。これは富賀神社大祭に感銘を受けた日本大学芸術学部の講師安野太郎さんが作曲し、三宅島高校音楽教師の會田鮎子先生とアカコッコ合唱団の渡辺昭洋さんを交えた十人で演奏した。

富賀神社大祭で阿古→伊ヶ谷→伊豆→神着→坪田の順に神輿を担ぎ継いでいくように、五角形になり時計回りに演奏者が次々に移動していく演奏体系だ。ある規則によって奏者は動き、各地域が交ざっていくと共に音の変化が起こる。音階がないゆえにハンドベルの単音が一定のリズムで鳴らされていくことで、独特な空気感を作り出していくのだ。

このセレモニー発表に向けて既に一か月前から練習が行われていた。ベルを鳴らすタイミングや動きなど、あらゆる規則を試行錯誤していくうちにこの楽曲が出来上がった。一つの変化で大きく雰囲気が変わる。これは単音ハンドベルだからこその面白さでもあるだろう。

また東京芸術大学大学院に在学する松田唯さんがデザイン、制作ともに手掛けた衣装にも注目して頂きたい。各地区を表す五色（白・紫・黄・赤・緑）の同じ色の衣装を着る事で視覚的にも五地域の区別を分かり易くしている。

楽曲としては全員が最後に一斉に鳴らして終わる。しかしこの響きが千年後の三宅島にも続くように、と作曲者の思いが込められている。この三宅島で学び、教え、考える。この響きがいつまでも続いていく事を願いたい。

（吉田　あんな）

校旗 お披露目

青い空と、青い海。台風が接近してきているとは思えないほどの快晴のなか行われた三宅島大学開校式にて、プレ講座で作られた三宅島大学の校旗がお披露目された。プレ講座に参加した方々が作製した小さな旗は、一つひとつ縫い合わせられ、一枚の巨大な校旗となっていた。心地良い風が吹く海辺ではためく巨大な校旗は、来場者の目を惹いていた。

三宅島大学のロゴをもとに、こんなにも多種多様に表現された旗が出来上がったことに感動を覚えずにはいられない。開校式で隣に座った島民の方が「あの旗、私も作ったのよ。二枚も作っちゃったの。今日は写真を撮りたくて来たのよ。」と、満面の笑顔で話してくれた。その嬉しそうな顔を見ていると、じわじわと嬉しさがこみ上げてくる。開校式が終わり、その島民の方と校旗の写真撮影を行った。わざわざ購入して持って来たインスタントカメラで、たくさん写真を撮った。こうやって、島民の方と一緒に作り上げた校旗は、これから末永く親しまれる旗になってくれるだろう。

（上地　里佳）

学生のあかし

開校に伴い、入学者に学生証が発行された。入学方法などの詳細は三宅島大学のホームページを参照のこと。提示すると東海汽船の割引が受けられるなどの特典もある。

表面は三宅島の自然をバックに「三宅島大学 学生証」の銀字が刻まれている。溶岩や地面に生い茂る植物など四つの図柄があり、そのなかから気に入ったものを発行できる。伊豆に縁がある方は伊豆岬を、元気なちびっこは海を選ぶなどの傾向が見られた。

裏面は本人の署名と写真が入る。字にも個性があり、小さな子が書いたと思われる微笑ましいひらがなもあった。式典で手続きをした入学生はその場で撮影をしたため、爽やかな青空を背負った顔写真が出来上がっている。文字とお顔を見ながら、どんな方なんだろう、三宅島とどういった繋がりなんだろうと思いを馳せる発行作業だった。

ただひとつしかない学生証。三宅島でのコミュニケーションのきっかけになれば幸いだ。

（三島　麻里江）

三宅島大学の最新情報はこちら

■三宅島大学公式ホームページ
http://www.miyakejima-university.jp/

■三宅島大学 Facebook
http://www.facebook.com/MiyakejimaUniversity

■三宅島大学 twitter
@MiyakeUniv

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

島を感じる 開校記念講座

ついに開校した三宅島大学。阿古船客待合所にて行われた開校式典、キックオフレクチャーの後、日比野克彦氏（三宅島大学教授）による記念すべき開校記念講座である「Rock 'n' dive」が行われた。当初の予定では、錆ヶ浜周辺を廻りながら、日比野氏と一緒に水中散策を行う予定であったが、波が高かったために伊ヶ谷にてスケッチ釣りを行うことになった。

スケッチ釣りとは、参加者が水中に潜り、発見した物をクレヨンで紙に描き写すというものである。おもしろかったのは、描いたものによって取得できる単位数が異なるという点だ。石、海藻なら一単位、魚なら二単位、亀ならなんと十単位の単位を取得できるという非常にユニークなシステムであった。

参加者は二十人ほどで、偶然通りかかった際に興味を持って、Tシャツ、短パン姿で飛び入り参加してくれた方もいた。天気に恵まれ、気温が大変高かったせいもあり、気持ち良さそうに海に飛び込む人の姿が見られた。参加者は小さな子供からご年配の方々まで幅広く、波打ち際でスケッチする方もいれば、本格的な道具を携えて沖の方まで泳いでいく方もおり、実に様々であった。

授業を終えた後は単位の認定式が行われた。残念ながら亀を見つけた方はいらっしゃらなかったが、一から四単位まで無事に全員が取得した。全身で島を感じ、島を描いた参加者の顔からは、心地よい疲れと大きな満足感があふれていた。

（長冨　将成）

溶岩ダンスワークショップ開催！

九月十九日の十七時半から、開校記念講座の第二弾として、振付家・ダンサーである近藤良平さんによる「溶岩ダンスワークショップ」が開催された。近藤さんは、NHK総合『サラリーマンNEO』や連続テレビ小説『てっぱん』オープニングの「てっぱんダンス」振付などで知られ、近藤さんのファンという方もいらして、会場であるメガネ岩付近の溶岩原には三十名以上が集まった。

まずは地べたに寝転がって、ゆったりと身体をほぐしたのち、頭に溶岩を乗せながらそれを落とさないように、近藤さんが取るポーズの真似をした。沈みゆく夕日を背景に、近藤さんの小気味よい口調で面白いポーズを次々に取っているうちに、心もほぐれていった。そうして全体の雰囲気がよくなったところで、二人一組になりお互いの手を合わせ、片方は目をつぶり、片方は誘導しながら身体を動かした。目をつぶることで、島に吹く風を感じたり、足の裏からは溶岩のごつごつした触感を楽しんだ。

薄暗くなってきたところで、「てっぱんダンス」をはじめから習って、振付の動きを声に出しながら、全員で踊った。テレビで観ていた人が多かったのか、みなさん覚えるのが早く、スムーズに踊っていた。

最後に、即興で三宅島のダンスがつくられた。釣りや波、くさやなどキーワードを参加者が出していくと、それに近藤さんが振付をしていき、それぞれの動きには歌詞がつけられ一つにまとめられた。しかし、ダンスとしてはまだまだ未完成で、もっと発展させていかなくてはいけないとのこと。今後、どのようなダンスが出来上がるのか楽しみだ。時間も遅く真っ暗になってしまったが、ひとまず出来上がったダンスを踊って、溶岩ダンスワークショップは幕を閉じた。

（飯田　達彦）

FUTURE SKETCH

日比野克彦氏と近藤良平氏による「Future Sketch workshop」が二十日、三宅島漁業協同組合の二階会議室で行われた。これは東京文化発信プロジェクト室のプロモーション事業であり、直接は三宅島大学と関係がなかったが、島民の方が朝早くにも関わらず参加されていた。スケッチということもあってか、小さい子供も多くいて、元気よく絵を描いている様子が印象的だった。

黄色のスケッチブック、Future Sketch Bookに未来のことを好きに描く。今回は「千年後の三宅島」と「一万年後の地球」がテーマだった。二つのチームに分かれ、まずはあれこれ自分のスケッチブックに想うことを描いてみる。その後、日比野さん、近藤さんを中心にみんなでお話をしながら、それをB0サイズの巨大スケッチブックに落としこんでいく。前半の「千年後の三宅島」では、私の参加したチームでは火口がひとつのポイントになった。噴火が繰り返されて火口がハート型になったり、その中に家が建ち人が住めるようになったり、さらには鉄の蓋で火口を覆うという発想まで生まれた。また、噴火と共存していくなかで、溶岩ドーナッツや溶岩キャンディーが売りだされるのでは、という想像も。

島の歴史を振り返りながら、島の未来を考える。わずかな時間だったが、島の内外の人の発想が混じり合うことで、さらに不思議で面白いアイディアが生まれたのだろう。他の地域で行ったワークショップの様子もサイトで見られるようなので、ぜひ検索してみたい。

（新飼　麻友）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。